

秋の祭礼とささら獅子舞

展示期間 令和2年9月13日(日)～10月11日(日)



ささら獅子舞とは、三匹の一人立ちの獅子によって舞われる芸能です。

令和2年。新型コロナウイルス感染症の流行の中で、季節ごとの伝統行事を例年のおり行うことができず、各地の伝統を伝える芸能の上演も困難となりました。

ささら獅子舞が躍動する桶川の秋。歴史民俗資料館では、伝承団体の協力を得て、資料展示にてささら獅子舞の姿をお伝えします。

三田原のささら獅子舞

三田原のささら獅子舞は、元禄年間に芸が整えられ、以来、盛んになったと伝えられています。現在では、毎年、10月中旬に三田原氷川神社の祭礼に舞が奉納されています。

舞は、辛領の拝礼に始まり、女獅子をめぐって法眼と後獅子の2頭の雄獅子がいさかう物語が雌獅子隠しを挟んで12の場面を通して演じられます。

平成に至って地区在住の子供たちに門戸を広げ、以後、三田原地区の人びとが皆で支える大切な行事となっています。



松原のささら獅子舞

松原のささら獅子舞は、本来、中秋の名月である旧暦八月十五夜に奉納されていましたが、その後、新暦9月15日に、さらに平成16年(2004)からは10月初旬の八幡神社の祭礼に奉納されるようになりました。

舞の所作は古風をとどめるとされ、地を踏みしめ、身体を大きく反らす所作など、低く力強い舞姿は神事であるささら獅子舞の姿をよく伝えています。

舞の構成は、女獅子、中獅子、大獅子の3頭の獅子と辛領による7場面の舞を伝えています。



前領家のささら獅子舞

前領家のささら獅子舞は、王子稻荷神社に隣接する地区の集会所を中心に営まれてきました。ここは「辛領小屋(せいりょうごや)」と呼ばれています。かつては、10月8日を中心として、王子稻荷神社、山王社、永久保稻荷神社など村内の神社を巡って舞が奉納されていたと伝えられています。

舞は、陣笠をかぶり、龍の姿を描いた羽織を着る辛領の先導によって、12切れの場が演じられています。かつては家を継ぐ男子が舞をつとめ、現在でも若者が「新習い」として参加し、しっかりと伝承されています。



小針領家のささら獅子舞

「領家のささら」として近郷に知られ、長い伝統をもち、用具を納める長持の蓋には江戸時代中期にあたる享保4年(1719)の年号が記されています。

昭和34年(1959)を最後に途絶えてしまいましたが、これを惜しむ地区の人びとによって、平成11年(1999)から平成14年(2002)に復活に取り組み、今日に至っています。

ささら獅子舞は、氷川諏訪神社の境内に設えられた土俵(修場)の上で行われます。木太刀と六尺棒による「棒使い」の演技に始まり、続いて、天狗に先導された大獅子、中獅子、女獅子によって演じられます。



獅子頭の形

三田原、松原、前領家のささら獅子舞で用いられる獅子頭は共通する姿を伝えています。雄獅子はまっすぐな2本の長い角をもち、長い鳥毛を頭から背にたなびかせています。女獅子は、一本の短い角を立て、柔らかな馬毛を振り下げています。

また、獅子頭を横から見ると、神楽の獅子頭とは大きく異なり、頭が低く長い鼻をもっています。

三田原では同種の獅子頭を龍神頭とする伝承があります。



獅子頭 松原のささら獅子舞



獅子頭 前領家のささら獅子舞



獅子頭 三田原のささら獅子舞

宰領と道化

川田谷のささら獅子舞では、三匹の獅子とともに舞う宰領が大きな役割を果たします。宰領は、舞庭を清め、三匹の獅子を招き入れる所作に始まり、終始、獅子を導きつつ演じます。

また、道化として滑稽な仕草で獅子舞を和やかにする役割も果たしています。

展示した前領家の宰領の面は道化の姿を表し、三田原では宰領を「山の神」と呼び、赤い鼻高の面が使われます。

展示する二枚の羽織は、前領家と三田原の宰領の衣裳です。

背の模様には、前領家では龍、三田原では神官姿の猿がそれぞれ描かれています。

これらは、「龍神」を表すともいわれる獅子を導いて舞を司る宰領と、獅子舞の中で道化を演ずる姿をそれぞれ表しているのではないのでしょうか。

花笠とささら（籠）

ささら獅子舞の名は、舞庭の四隅に立つ花笠役の手にする竹の楽器に由来します。花笠役は、「花笠」あるいは「おかざき」とも呼ばれ、子供のつとめる役割とされています。

花笠の姿は、室町時代の風流踊の扮装に通じ、楽器のささら（籠）は庶民の芸能に広く使われていました。

ここに展示する川田谷前領家のささら獅子舞の花笠は、顔を隠す水引の正面に、集落の近くに陣屋を構えていた旗本牧野家の家紋（丸に三つ柏）を付けています。

獅子と太鼓

ささら獅子舞に用いられる太鼓は、杵を使うことなく、桶胴にあてた皮に紐をとおして締め上げるといった独特の形をもっています。

獅子の舞い手は、短い撥（ばち）をもち、腰にくくりつけたこの太鼓を打ち鳴らします。川田谷地区のささら獅子舞では、女獅子が拍子をととり、2頭の雄獅子は舞の所作に合わせて力強く太鼓を打ちます。

川田谷地区のささら獅子舞では、舞いを納める時に、以下の言葉をとえます。

「太鼓の胴（道具）を きりりとしめて
ささらをしゃんと すりとめさいな」

花笠とささら（籠）

ささら獅子舞は、終始、笛方の演奏する笛に導かれて舞われます。川田谷では高い調子の笛が用いられ、小針領家では低い調子の長い笛が用いられます。かつては、村内で自作され、先輩から後輩へと引き継がれたそうです。現在、三田原や小針領家では若い女性が積極的に伝承活動に参加しています。

川田谷のささら獅子舞では、年配の人びとによって獅子唄が歌われます。歌詞には江戸時代初期の歌謡の伝統が引き継がれているといわれています。

向こうへ小山は中は籠山梅の花 花を散らして遊びなさいな
打つも太鼓打たぬも太鼓 われとおれとの間へこいな



宰領の面と持ち物 左 前領家 右 三田原



描かれた龍（前領家）



描かれた猿（三田原）



花笠がするささら（前領家）



花笠（前領家）



太鼓を打つ女獅子（前領家）



花笠とささら
『江戸図屏風』より



笛方（三田原）